
鼻水が喉に詰まって死んだ私・・・

京本 20

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鼻水が喉に詰まって死んだ私・・・

【Nコード】

N0674K

【作者名】

京本20

【あらすじ】

鼻水が喉に詰まる悲劇・・・

私は、もう直ぐ死ぬ!!!

と、思った瞬間、私は気が付いた。

夢から覚めたのだ。

私の顔は沢山のあざだらけだった。

私は、病気でもう直ぐ死ぬところだ。

目の前には、可愛い孫と、その家族が付き添っている。

私は、早く死にたい。

早く死なせて欲しい。

どうして安楽死が認められないのだ。

こんなにも死にたい理由は、家族は知っている。

家族に私を殺して欲しい気持ちは、やまやまだが、私を殺せば犯罪になる。

どうして、私は、もっと早くこうなることに、気づけなかったのだろうか？

チャンスは一杯あったはずだ。

せめて、事故で動けなくなる前に、自殺すれば良かったんだ。

私は、ずっと後悔していた。

寝て起きれば、体は傷だらけ。

家族は泣きながら、私に謝るだけ。

こんな日々はもう、たくさんだ。

家族に殴られる日々は、もう嫌なんだ。

家族だって悲しんでいるんだ。

体重が軽かったそうさ。

本来、生後2週間なら、ものすごいスピードで成長するはずで、体重は本来増えるはずだ。

それなのに、体重が以前よりも軽いと言うことは、食べ物を食べることができなかったということになる。

俺は、その後、母ちゃんの母乳を貰い受けるだが、俺は、その母乳を飲まなかったらしい。

粉ミルクも飲もうとしなかった。

恐らく、鼻水を飲み込んだことが、トラウマになり、何かを飲み込むという行為そのものに、漠然と恐怖を覚えていたのだろう。

母ちゃんは、仕方なく、哺乳瓶の吸い口をハサミでちょん切って、ジヨッキのようにして無理やり飲ませたらしい。

そのせいで俺は、餓死することだけは免れた。

ただ、吸う力が発達しなかった為か、俺の口はとても緩い物となっていた。

幼少時代は、フルタイムでよだれを流し続けた。

大人になった今でも、口は開きっぱなしだ。

そのせいで、容姿あまり良く見えず、女にモテることはなかった。

^^^「俺は、生き送れた後に、ブサイクな嫁さんと結婚した!! おっと、愚痴は、この辺にしておこう。」

不細工な嫁さんに、また、頭をぶん殴られてしまう。」

—————

「肝心な話の途中で、腰を折るんじゃない。未来の俺!! 現在のお

前は引つ込んでろ！！バトンを返せ！」
俺は、話に割り込もうとした未来の情けない奴から、バトンを取り返した。

――チェンジー――

肝心なのは、ここからだ。

俺の推測では、産まれてまもなく、俺は窒息死をしかけたと思われる。

当時は、第三次ベビーブームと呼ばれる真っ只中で、産婦人科病院は超多忙だった。

そんな多忙の中で、看護婦さんは大変だっただろう。

仮に俺が、突然死んでいる状態で看護婦さんに見つかったらどうなるだろうか。

― 大事である。

医療ミスである。

病院側は、責任を取りたくない。

この事実だけは、何とかしてもみ消したい。

病院側は何事も無かったかのように振舞うだろう。当然である。

ここで、なぜ、鼻水が原因であると、俺が思うのか疑問に思うだろう。

病院に重大な過失があるかもしれないのだから……

けど俺は看護婦さんが大好きだ！、

だから、あんまり、病院を疑いたくない。

それに俺自身は、物心付いた時から、鼻水を出していたのだ。

大好きなクレヨンなんかの、クールなホーちゃんと一緒にならば、
光栄なことはない。。。

いけない、余計なことを話しすぎた。話をもどそう。

俺は、何とか一命を取り止めて生きている。

今とても元気だ。

じゃあ、何が不満なんだ。

結果オーライでいいだろうと思うかもしれない。

自分自身で鼻水飲んだのだから、自業自得であり、生きてい
るとに感謝しろと言うかもしれない。

確かに、そうかもしれない。

けれど、女にモテない以外の大問題が発生しているのだ。

それは。。。。

時折、窒息して死んでしまう夢を見ることだ。

所詮は夢と思うかもしれない。

けれど、夢の中の俺は、それが、窒息しているという認識はできな
いのだ。

何がおこっているのかわからないのだ。

思うに、赤ん坊のころは、理性的な脳はまだ、作られていないと思
うんだ。。。

窒息がなぜ、苦しいのか理解できない。

だから、俺は、夢の中において自分に何が起きているのか理解で
きない。

それは、すなわち、夢だと気づいて、途中で夢から覚める条件がな
いと言うことなのである。

俺は、そのとき、窒息して意識を失うであろう直前までの苦痛を全て体験するんだ！

これが、どれほど、辛いことかお前らに判るか！？

「すまん！！感情が入りすぎた。

俺は話を元に戻そうとした。

と、その時、未来の俺が、しゃしゃり出てきた。

「……人は誰しも時に、イラっとしてしまうことがあるだろう。その感覚が、無限が増えていく感じなんだ。」

最初は小さなイラっつと、そこから、徐々にイライラとなり、だんだんと、イライラが加速してくる。そりゃもう苦痛なんだよ。そのイライラは、とどまるところ知らない感じで、。

100億程の「イラ」という感覚が最後に同時に襲って来ちゃうんだよ~~~~!!!!

その極限状態は、はつきり言って、究極の拷問だよってへw

まあ、そんな感じだ。

へなちよこの未来の俺にしては、良く考えたな。

でも、クドイし判りにくいから、お前は引っ込んでろ。

2行で俺が答えてやる。

判りやすく例えらるとなら・・・

でも、クドイし判りにくいから、お前は引っ込んでろ。

2行で俺が答えてやる。

判りやすく例えらるとなら・・・

究極の快樂がセックスの絶頂にたどり着いていく過程としたら、

意味わかるか？

これから、詳しく説明してやるが、この時点で何も考えようと思わないような奴は、

この先の説明も理解できないだろう。

そんな落ちこぼれは、とっとと出て行くことをお勧めする。。

さて、本題だ。。。

「夢の中で五感を取り除いた苦しい体験をする」と、いうのは、どんな夢を見る時だと思っただろうか。

人間が本来、苦しさを感じるのは、何らかの五感を頼りにしている場合が多い。。

例えるなら、夢の中で、人に嫌がらせをされるとか、思うように仕事ができないとか・・・

まあ、ありきたりな嫌なことだ。。

これは、そういう場合とは違う。

五感を除いた体験とは、病気や風邪を引いて熱が出て、今その時が、何もしなくても苦しい状態・・・

そういう状態では夢の中でも自然と苦痛を感じる訳で、悪夢の発動条件となる。。

お前らも、風邪や体調を崩している時に、嫌な夢を見ることが多いと思わないか。。

それが、お前らにとって最も嫌な出来事の夢だったりしていないか。俺も同じだ。。

ここまで読んで理解できた奴はいるか？

そいつは、結構、頭のいい奴だから、これから、俺が言いたいこと

も。なんとなく判っているかもしれない。

俺は、結局、愚痴が言いたいただけなんだ。未来の自分と同じで女々しい奴なんだ。

それを判っていても、俺は皆に伝えないといけないことがあるんだ。まず1つ

「鼻水を飲んで、意識の飛んでしまった赤ちゃんを助けるのだけは、してはいけない。」

そのまま、既に昇天してしまっている。もう、苦しみはない。わざわざ、生き返らせて、俺のように苦しい思いは、させる必要などない。

親は、天命だったと諦めてもらって結構である。

2つめは、断言できないが・・・俺にとっても皆にとっても、不幸なお知らせになるかもしれない。

覚悟して聞いてくれ。

俺は最近、病気で、死んでしまった身内を見送った。

そいつは、死の間際の苦しむ間に、悪夢を頻繁に見たと言う。

つまり、人は死に際に立たされると、自然と悪夢をみてしまうのだ。

その人は悪夢を見る度に、理性的に自制心で覚めたり、人に起こされて助かっていた。

だが、俺の場合は、苦しみが寝顔に現れた時点で、既に手遅れである。

窒息死の記憶は既に展開されているから五感は反応しない。

声は、もちろん俺には届かない。

他人の声では、起きられず、殴られるしかなくなる。

未来の奴の様に、何度も身内にぶち殴られることだろう。

きつと身内は、いずれ、老人虐待の罪を着せられて、逮捕されるかもしれない。

そうなったら、俺は、地獄の拷問からは、逃れられなくなってしま
う。

もし、俺の仮説が正しいなら、その時、俺は、自ら命を絶つ!!!。

何か避ける方法があればよいが、それは、世の中次第だ!!!。

夢のコントロールや、安楽死の合法化、何でもいいから、俺は期待
する!!!。

だが、まちがっても「悪い夢から覚ます為なら。老人を殴っても罪
にならない」、という法律だけは、

絶対に作るんじゃないぞ!!!。

最後に忠告しておく・・・ここからが、皆にとっての、不幸だ・・・

人が死の淵に来た時に、自力で心肺が動かなくなった時、または人
口呼吸器がはずされた時に

俺の窒息死と同じ体験をすることになる可能性があるぞ。なんと
いっても脳に酸素が行かない。

逝く瞬間の手前の苦痛が待っている。

その時は、覚悟したほうがいいぞ・・・

最後に逝くまでのあの感覚は、死を体験した者にしか判らないのだ
から・・・

そして、なぜ、俺のように、赤子の時の窒息体験だけが、悪夢病に

適用されるのかは判らない。

どうして、大人が窒息しても、悪夢の後遺症がのこらないのかも・

。

俺の推理や仮説も単なる妄想かもしれない。

気になる奴は、今のうちに調べて、気をつけるべきだろう。

と、俺は、ここにきて未来の自分にバトンを返すことにする。

おれの役目は終わったし、未来の俺が言いたいことがあるかもしれない。

未来の俺は、何を思っているのか知らないが、過去の俺にとっては、どうすべきかは知っている。

本当は未来の俺のことは、どうだっていいのだが・・・

「最後に、皆に未来の俺から、言うておくことはないか？」

・

返事は無いようだ。

きつと、アイツは、すでに夢の中なんだろうな・・・

（後書きと注意）

ラストの死の淵の理論は間違っている。

どこをどう間違っているのか説明するのは面倒なので自分で考えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0674k/>

鼻水が喉に詰まって死んだ私・・・

2011年1月18日22時54分発行